

フェルディナン・ビュイッソンの 教育思想の形成に関する研究

—第三共和政初期教育改革史研究の一環として—

尾上 雅信

(岡山大学教育学部)

1. 研究の課題と方法

本研究は、フランス第三共和政確立・発展期における1880年代初等教育改革の立案・推進主体の中心にあったF.ビュイッソン (Buisson, F; 1841-1932) の教育思想の形成過程とその特質をあきらかにすることを具体的な課題とするものである。

第三共和政初期の教育改革に関する従来の研究は、新たに創出される学校教育の制度的改革の特質とそれを立案・推進した主体の政策的意図の解明に重点が置かれてきた。そうした研究の蓄積のなかで、フランス革命と第三共和政の関係についての一つの「通説」が形成されてきたことは、否定できない。それはすなわち、フランス革命が「無償」「義務」「世俗(性)」という公教育の理念を産出し、100年後の第三共和政においてそれが実際に実現されたとする歴史的評価である。この「通説」に対しては、1980年代以降、フランス革命史およびその教育史研究の側から疑問や問題提起がなされてきた。その一方で、第三共和政の教育史に関する研究においても、「通説」への批判的考察は蓄積されてきたのであるが、それらは政治史や社会史あるいは現代社会学からのアプローチの成果がほとんどであり、それらの考察からは、当時形成されつつあった「教育学」の立場からの提言が見落とされ、それがもつであろう歴史的意義に関する考察がなされてこなかった。本研究は、さきの「通説」の淵源を追求しようという初発の問題関心とともに、従来の第三共和政教育(改革)史研究に対する、この点についての批判的な問題関心を根底に抱くものである。すなわち、教育における制度改革に関する歴

史的検討には、制度改革の特質や政策的意図の析出のみならず、そのような制度の改革を必要とした、あるいはそれを導き出した教育論（思想）—そこでは教育の具体的な内容と方法に関する思索の展開が中心となる—の析出とその歴史的検討ならびに位置づけが必要であり、こうした作業課題を遂行することによって、従来の制度（史）的な研究成果に対して教育学・教育史研究の立場から新たな成果の蓄積がなされ得ると考えられるのである。本研究において、のちにみずからソルボンヌで「教育科学」講座を担当することとなるビュイッソンをとりあげ、その言説の分析をとおして第三共和政教育改革を検討しようとする理由はここにある。そして、それはまた、本研究が従来の教育制度・政策史の研究あるいは政治史・社会史的もしくは社会学的研究とは異なる独自性をもつ根拠となるのである。このことはまた、フランスにおける第三共和政教育史研究の近年の動向が、学校制度・政策上の改革の解明から、教育実態—具体的な教育内容・方法を含め、クラス・学年編成などの「教育組織」—の解明へとシフトしつつあることとも対応しているのである。

ビュイッソンそれ自体に関する研究は、近年、フランス・プロテスタントに関する歴史研究において、彼の宗教思想ならびにその形成過程の解明がなされている。しかしながら、彼の教育思想については、第三共和政に関する歴史研究全般はいうまでもなく、教育史研究においても、教育にかかわる彼の事跡の解明をはじめ、教育思想の形成過程、思想体系の解明はもちろんのこと、教育に関するその言説の系統的な分析とその特質の解明さえ、いまだまったく不十分な状況にある。このような研究状況をふまえ、さらにさきの問題関心をかさねあわせ、本研究では、第三共和政確立前後から1880年代にいたるビュイッソンの経歴をあきらかにしつつ、その時系列にそくして彼の具体的な言説をとりあげ、その基本的特徴を明確にする作業によって彼の教育思想形成過程を追求し、彼の教育思想の特質をあきらかにすることを具体的課題として設定した。この課題の遂行をとおして、1880年代教育改革に関して、具体的な教育内容・方法レベルにおける改革の思想にまで踏み込んだ総合的な再構成と再検討の手がかりを得ることが、本研究の目的である。

2. 研究の構成と内容

本研究の構成は7つの章からなる。その構成は、ほぼビュイッソンの事跡—その青年期から1880年代教育改革期にいたる—の時系列にそったものとなっている。第1章、第2章では主として青年期における宗教と道徳をめぐる思想形成の過程、ならびに共和主義的な活動の実際をあきらかにした。第3章、第4章ではウィーンとフィラデルフィアで開催された万博の学校博覧会に派遣され、教育界にデビューする契機となった両万博における学校博覧会に関する報告書—これまでの教育史研究ではほとんど未開拓の史料である—の基本的特徴をあきらかにすることをとおして、彼の教育に関する問題関心の初発の実態とその特質を解明した。第5章ならびに第6章では、両万博およびそれともなう海外視察においてとくに彼が目撃した万博参加各国、とりわけアメリカ合衆国を中心とした宗教教育と道徳教育の現状と改革の動向に関する彼の認識とその深化について、さらに教育方法の新たな改革動向として注目された「直観的方法（直観教授）」に関する彼の思索の深化と展開について考察した。第7章では、実際に1880年代教育改革を主導する立場となった時点における彼のさまざまな言説—未開拓・未分析の講演記録、雑誌論文や法令コメンタールなど—toみられる教育改革に関する認識を中心として—の分析をとおして、その教育改革論を構造的に解明した。これらの考察をふまえて、終章では全体のまとめをするとともに本研究の具体的な成果を示し、さらにその成果がもたらすであろう展望について、第三共和政教育改革史研究に照準化して考察した。

3. 研究の成果と展望

本研究の具体的な成果は、まず第一にビュイッソンの事跡と思想形成過程の解明にある。従来の教育史研究においてほとんどあきらかにされてこなかったビュイッソン自身の青年期から1880年代教育改革期にいたる事跡と宗教および教育に関する思想の展開過程をあきらかにすることで、フランス近代教育史研究の隙を埋めることができた。より具体的な成果として、青年期における「自由キリスト教」思想の形成過程と内実の解明により、宗教の本質を「義務」の信仰におくことによって宗教と道徳を同一視しようとする彼の宗教・道徳観を一つの分析視

点にすることで、1880年代教育改革における最大の焦点であった、伝統的宗教に依拠しない道徳教育導入過程ならびにその教育内容に関する再検討の可能性を開いたこと、また、これまで未開拓であったウィーン万博ならびにフィラデルフィア万博の報告書をはじめと本格的に検討・分析したことにより、ビュイッソン自身の思想形成過程の解明のみならず、彼を媒介とした第三共和政初期教育改革における合衆国の影響を手がかりにして、教育史研究における国際交流的な分析への展望を開いたこと、などがあげられる。第二に、ビュイッソンの言説の分析をとおしてあきらかとなった1880年代の教育（制度）改革を支える教育論（思想）について、彼の言う「教育的改革」としてあきらかにできた点である。その具体的な内実は、学校における教育内容の拡充とその実施を可能にするための直観的方法の積極的導入を促すことにあった。この実現のために、ビュイッソン自身、直観的方法に関する考察を深化・発展させていった過程をあきらかにできたのである。このような研究成果により本研究は、1880年代教育改革期において、ビュイッソンの教育改革論を端緒として教育改革のための理論をめぐって複数の教育学者たちが一種の知的サークルを形成し、教育改革のための知の連携作業—とりわけ、教育の方法に関する理論の紹介・導入と転換を中心に—を構築していたことを展望し、このことを機軸として新たな第三共和政教育改革史像を再構築し得る可能性と展望を開いたのである。